



競艇のあゆみ

(1991～2000年)

第4章

連合会・競走会編

連合会編

●はじめに

この10年は、様々な出来事があった。昭和30年から会長職を勤めていた笹川良一氏が平成6年2月に辞任届を提出、それに伴い副会長だった笹川陽平氏が会長に推挙され就任(平成6年4月6日)。前笹川良一会長は名誉会長へ。新しい会長が誕生し、未開の地・北海道に「ボートピア釧路」がオープンと新たな気持ちで臨もうとしていた矢先、常滑で騒擾が発生。そしてその明くる年は、年明け早々日本全土を震撼させた阪神大地震が起き、競艇業界にも少なからぬ影響が出た。この阪神大地震の影響がまだ残る中、笹川良一名誉会長が死去された。

これらを払拭するように、全レース進入固定競走が実施され、「海の日」祝日化を記念しての「オーシャンカップ競走」が新設された。パソコンを利用した情報の提供(パソコン専門誌への出稿、ホームページの開設)、ナイターレースの実施等々、平成8年7月に策定された「プラン21」の5ヶ年計画に基づき、積極的に各種施策を推し進められた。

そんな中での連合会の10年の動きをみてみたい。



●広域発売の推進

競艇のおもしろさは、競艇場に足を運んでもらい、投票をしていただくという考え方であったが「サービスの原点は一流の選手がビッグタイトルをかけて戦うレースをみせ、投票していただくことであり、競艇場に行かなくても“いつでも、どこでも、おもしろい競艇”を楽しんでいただくことにある」として、昭和57年から早朝前売発売をはじめとし、場間場外、場外発売、電話投票と広域発売の拡大が進められた。

場間場外発売

昭和57年4月、舟券発売方式にかかわる「モーターボート競走施行規則」(省令)の一部改正に伴い、4大競走(鳳凰賞、全日本選手権、笹川賞、MB記念)の準優勝戦・優勝戦での特別発売が可能となった。業界で初めての場間場外発売(特別発売)が行われたのは同年8月の蒲郡競艇場(MB記念)で、このとき尼崎、若松の両競艇場で併用発売が行われ、予想以上の成績を収めた。

昭和60年に入ると場間場外発売は一層重要な施策として重点が置かれ、関係者の努力もあり、同年9月、「モーターボート競走施行規則」の一部が改正され、場外発売が可能となった。昭和61年3月に平和島競艇場で行われた「第31回鳳凰賞競走」では、桐生、蒲郡、住之江、福岡の4競艇場が後半2日間の全レースを対象に発売を行った。

その後、場間場外発売を行う競艇場も増え、同発売ができる「賞金王決定戦競走」も新たに増えたことから、当初全体の売上の0.14%しか占めるに至らなかったが、平成2年には3%を超えるまでになった。

このころから、バブル崩壊の影響を受けて売上低迷時期に入るが、売上を上げるために場間場外発売の日数拡大を図っていった。

また「もっと特別競走への投票参加機会を増やせないか」というファンの要望にこたえ、平成4年3月31日付で「競走場を利用する場外発売について」(海総第168号)ほか通達があり、発売対象競走の拡大、対象レース・発売日の条件緩和、地区の指定の見直しが行われた。平成9年にオーシャンカップ(平成9年3月8日、海総第69号)、平成10年が競艇王チャレンジカップ(平成10年3月31日、海総第149号)、平成11年が競艇名人戦、女子王座決定戦、ナイターレース(平成11年7月8日、海総350号)で発売できるとされた。ナイターレースについては、桐生のレースを平成11年9月2日から三国、宮島、大村の3場で発売することになり、好調な発売状況を示した。

場外発売場(ボートピア)

場外発売場のボートピアは、昭和60年9月に施行規則の一部が改正され設置が可能となったことから、同年10月に連合会にボートピア推進部を新設し、ボートピア設置の推進を図っていった。

第1号は、昭和61年8月の「ボートピアまるがめ」で、窓口が5窓で競艇場からも近いところに位置し、小型の場外であった。都市型の場外が誕生したのは平成に入ってからで、平成3年1月の「ボートピア姫路」からである。

ボートピア姫路は広域化が進む中、競走会の委託業務がどのようにあるべきか、そのあり方を示すように、舟券発売を施行者から委託を受け競走会が行うこととなった。

ボートピア姫路のあと、次のように夫々設置されたが、ボートピア釧路については、釧路の産業(漁業、製紙業など)に従来ほどの活力がなく、売上が上らず平成11年6月にクローズした。